

中古音重紐の音韻論的解釈をめぐって

中 村 雅 之

1. はじめに～有坂・河野説～
2. 舌音字（知組・来母）の介音問題と三根谷氏の音韻論的解釈
3. 三根谷・平山説の問題点
4. 類相関による舌音字B類説とその問題点
5. 結論
6. 余論

1. はじめに～有坂・河野説～

隋・陸法言『切韻』の反切より帰納される音韻体系（すなわち中古音）の研究において、これまで幾度となく議論されてきたテーマの一つに“重紐”に関する問題がある。例えば、ともに支韻開口群母である「奇」（『廣韻』の反切は渠羈切）と「祇」（巨支切）に対して、中古音研究の開拓者であるカールグレンは [g' jie] という共通の音価を与えた。しかし、これらは『切韻』において異なった小韻（同音字のグループ、中国の用語で“紐”）として登録されているものであるから、その解釈では同音の小韻が二箇所に重複して（“重”）存在することになり矛盾する。その音声あるいは音韻上の差異を探求すべく多くの研究者が議論を重ね、現在までに少なからぬ成果を得たが、まだいくつかの問題を残している。本稿はこれまでの議論を振り返りつつ、特にその音韻論的解釈の再検討を試みるものである。

重紐の問題はとりわけ日本で盛んに論じられてきたが、その先駆けをなしたのは有坂秀世（1937-1939）であった。その中で有坂氏は「カールグレン氏の拗音説を評す（一）～（四）」であった。その中で有坂氏は「切韻・廣韻の反切は、その本來の目的から考へる時は、一つ一つが相異なる音を表すものでなければならない。然る處、廣韻の中には、切字 [=反切上字] も同母、韻字 [=反切下字] も同韻であって、一見互に同音であるかの如く見える反切が、幾對か存在する。」と述べて、それらの音声的差異を詳しく述べた。そのような音節の対および區別が後に重紐と呼び習わされるものである。重紐の対立は唇牙喉音の拗音音節のみにあり、『韻鏡』等の韻図においては一方を

3等に、他方を4等に配することで区別される。本稿では現在一般化している方式に従って、唇牙喉音の拗音音節にA・B・Cの三類を区別する。すなわち、重紐の対立を有する韻の唇牙喉音音節のうち、韻図の3等に現れるものをB類、4等に現れるものをA類とし、重紐の対立をもたない韻における唇牙喉音音節をC類と称する。⁽²⁾冒頭に挙げた「奇」はB類、「祇」はA類に属することになる。

有坂氏はA類とB類の音声的差異を介音に求め、A類 [-i-] (口蓋的)、B類 [-i̯-] (非口蓋的)という二種類の拗介音を設定した。C類もB類同様 [-i̯-] である。その根拠としたのは以下の諸資料であった。

1) 朝鮮漢字音～牙喉音字にのみ対立がある。以下は見母字の例。

山摶：[A類] kiən [B類・C類] kən

止摶：[A類] ki [B類・C類] k̯i

臻摶：[A類] kin [B類・C類] k̯in または kən

2) ベトナム漢字音～唇音字にのみ対立がある。A類字では「卑 ti」「標 tieu」のように舌音化が見られるが、B類・C類では「皮 bi」「表 bieu」のように唇音を保っている。

3) 日本吳音～臻摶牙喉音において、A類はイン (イチ・イツ) 型に、B類・C類はオン (オツ) 型になる。

4) 福州音～臻摶牙喉音において、[A類] king [B類・C類] küng または köung のような対立がある。

5) 汕頭音～臻摶牙喉音において、[A類] kin [B類・C類] k̯in のような対立がある。

有坂氏にややおくれて出た河野六郎「朝鮮漢字音の一特質」(1939)は、朝鮮漢字音に関する綿密な資料を提供して、有坂説に更なる根拠を与えた。これ以後、重紐の差異を二種類の拗介音に帰する考えは「有坂・河野説」として世に広まることになる。

2. 舌音字(知組・来母)の介音問題と三根谷氏の音韻論的解釈

有坂(1937-1939)では唇牙喉音字の拗介音についてA類 [-i-]、B類・C類 [-i̯-] という結論を出したあと歯音字(及び日母字)の介音について論じ、韻図で2等に配される莊組字に [-i̯-]、3等の章組字・日母字・4等の精組字に [-i-] を設定した。⁽³⁾これら歯音字の解釈については異論なく認められている。問題は舌音字(知組・来母)である。有坂氏は、朝鮮漢字音において舌音字が一般に拗音で現れる事、さらに『切韻指南』の反切門法に「廣通者謂見溪群疑幫滂並明非敷奉微曉匣影此十五母爲切、韻遂知徹澄娘照穿牀審禪來日第三等、並切第四。」とあるのが舌音・歯音の3等字と唇牙喉音4等字との共通性を反映するものようである

事から、舌音字の介音を [-j-] とする可能性を示唆した。

一方、河野（1939）は、反切下字を系聯させてみると、A類とB類の区別が曖昧になる箇所では多くの場合舌音字が介在している事から、舌音字の介音がA類とB類の中間のように感じられたのではないかと述べた。例えば、至韻の「棄」（詰利切）は『韻鏡』で4等にあり、朝鮮漢字音はkiであるからA類、「器」（去冀切）は『韻鏡』で3等にあり、朝鮮漢字音はkiiであるからB類で、明らかに対立している。ところが、反切下字を系聯させてゆくと、「冀」（几利切）の存在によって、みな一類となってしまう。これは来母字の「利」がA類の「棄」とB類の「冀」の双方の反切に用いられている事による。

この河野（1939）の論を受けて、三根谷徹「韻鏡の三・四等について」（1953）では舌音字の中立性を反映させるべく、重紐の区別を音韻論的に声母に帰する考え方を示した。すなわち、唇牙喉音字のA類に口蓋化声母（/pj/, /kj/ 等）を、B類・C類に非口蓋化声母（/p/, /k/ 等）を設定すれば、音韻論的には介音にただ一つの /i/ を認めるだけで済み、舌音字の介音問題が解消するというものである。三根谷氏はその後の漢字音研究においてもこの解釈を用いている。今、『越南漢字音の研究』（1972）によって三根谷氏の表記をいくつか示すと以下のようになる。

	<支韻>	<仙韻>	<宵韻>	<質韻>
幫母 A類	卑 /pjie/	鞞 /pjian/	飄 /pjiau/	必 /pijet/
B類	陂 /pie/	—	餽 /piau/	筆 /piet/
群母 A類	祇 /gjie/	甄 /kjian/ [見母]	翹 /gjiau/	吉 /kjet/ [見母]
B類	奇 /gie/	乾 /gian/	喬 /giau/	姞 /giel/
章母	支 /tšie/	鑿 /tšian/	昭 /tšiau/	質 /tšiet/
知母	知 /tie/	追 /tian/	朝 /tiau/	窒 /tiet/
来母	離 /lie/	連 /lian/	燎 /liau/	栗 /liet/

三根谷氏の解釈は巧妙であるが、音声レベルにおいては三根谷氏も [-j-] と [-i-] の二種の介音を認めているようであるから、舌音字がいずれの介音を有するかという問題は依然として残っている。

その後、平山久雄「中古漢語における重紐韻介音の音価について」（1991）では重紐の別を声母に帰する三根谷氏の音韻論的解釈を採用した上で、音韻論的に一つの /i/ として表示される介音が、音声レベルでは結合する声母により、前舌性の強い順に [-i-]（見A組・章組・精組）、[-i-]（幫A組・來母・知組）、[-I-]（見B組）、[-i-]（幫B組・莊組）の4段階に現れるという考え方を示して、舌音字の中間的性格を説明しようとした。舌音字が反切下字となる時、唇音音節ではA類に、牙喉音音節ではB類により多く用いられる事による推定である。この音声モデルに従えば、「四段階の中で同段階の音節同士だけでなく、隣の段階に属する音節同士までは互いに被切字・下字の関係に立ち易いのに対して、二段階以上隔てた音節同士は被切字・

下字の関係に立ちにくい」と仮定できるという。しかし、上田正『切韻諸本反切総覧』(1975)で原本『切韻』のものと推定されている反切をもって検すれば、唇音B類の帰字(被切字)に対して來母字が反切下字になるなど、二段階以上隔てた例が十数例存在しており、この複雑な音声モデルも『切韻』反切のすべてを説明できるものとは言えないようである。また、平山論文では重紐の対立を有する韻(平山氏の言う重紐韻)における介音の問題のみを扱っており、反切上字として多用されるC類音節の介音については全く述べられていない。後述するように、『切韻』の反切においては、帰字の介音は下字によってのみ導き出されるのではなく、上字も重要な役割を担っているのというのが本稿の立場であるから、下字のみを対象とした平山氏の方法には些かのためらいを覚える。

3. 三根谷・平山説の問題点

三根谷・平山両氏は重紐の音韻的差異を声母に帰している訳であるが、その最大の問題点は『切韻』の様々な反切用字法を音韻論的にうまく説明できない事である。例えば、C類の反切上字とA類の反切下字でA類の帰字を注する(これを[C類+A類→A類]と表記する。以下これに倣う。)場合を考えてみると、両氏の体系では上字と帰字の声母が常に異なることになって、甚だ奇異である。今、上田(1975)の推定による原本『切韻』の反切と三根谷(1972)の音韻表記に従って具体例をいくつか挙げてみる。(比較のために、上字と帰字の声母に下線を施した。)

- [C類+A類→A類] 敷 /p 'iuʌ/+資 /pjien/ → 繕 /p 'jen/
- [C類+A類→A類] 居 /kiʌ/+蜜 /mjet/ → 橋 /kjiuet/
- [C類+A類→A類] 許 /xiʌ/+規 /kjiue/ → 際 /xjiue/
- [C類+羊₄→A類] 居 /kiʌ/+延 /jian/ → 順 /kjian/

いずれの場合も反切上字と帰字の声母は異なっており、反切の原則に背くことになる。三根谷(1953)では、/k/ : /kj/のような対立は反切上字ではなく反切下字によって表されるのが原則であると述べるが、なぜ声母の対立が反切下字によって示され得るのか理解に苦しむ。仮に上のような例を「反切下字の強い口蓋性が反切口唱の過程で声母の口蓋化をもたらす」と解釈してみよう。かなり無理のある解釈であるが、仮にそう考えた場合でも、次のような例ではやはり反切下字にも特に強い口蓋性は現れていないので、なぜB類ではなくA類の帰字を導くかを説明できない。

- [C類+齒₄→A類] 於 /iʌ/+笑 /siau/ → 要 /'jiau/
- [C類+舌₃→A類] 去 /k'iʌ/+智 /tie/ → 企 /k'jie/
- [C類+来₃→A類] 房 /biaŋ/+連 /lian/ → 便 /bjian/

[C類+來₃→A類] 居 /ki_A/ + 誅 /liuei/ → 癸 /kjuei/

いずれの場合も帰字に口蓋化声母が現れる条件を音韻論的に示す事は困難である。帰字の声母が反切上字によって表されるというのは反切の大原則であるが、三根谷・平山説ではそれさえ否定しなければならない事になる。もし、重紐の区別を音韻論的にも介音に求めるなら、このような問題は解消する。A類の介音/i/, B類・C類の介音/i/として、上に挙げた例を解釈しなおしてみると、以下のようになり矛盾がない。

[C類+A類→A類] 敷 /p 'iu_A/ + 斎 /pien/ → 繢 /p 'ien/

[C類+A類→A類] 居 /ki_A/ + 蜜 /miet/ → 橋 /k_{iuet}/

[C類+A類→A類] 許 /xi_A/ + 規 /kiue/ → 賴 /xiue/

[C類+羊₄→A類] 居 /k_i_A/ + 延 /jian/ → 甄 /kian/

[C類+齒₄→A類] 於 /'i_A/ + 笑 /siau/ → 要 /'iau/

[C類+舌₃→A類] 去 /k 'i_A/ + 智 /tie/ → 企 /k 'ie/

[C類+來₃→A類] 房 /b_{iop}/ + 連 /lian/ → 便 /bian/

[C類+來₃→A類] 居 /k_i_A/ + 誅 /liuei/ → 癸 /kjuei/

そもそも重紐の区別を声母に帰する三根谷氏の音韻論的解釈は舌音字の介音問題を解消するためのものであった。したがって、舌音字の介音問題さえ解決されれば、重紐の音韻論的差異を介音に認めて特別の支障はないはずである。筆者は舌音字の介音にA類相当の/i/を想定することで舌音字をめぐる問題は十分解決できると考えており、上の最後の3例で「智」「連」「誅」の介音を/i/としたのもそれに従ったものであるが、これについては次章で詳しく述べる。

さて、三根谷・平山説の問題点をもう一つだけ挙げる。『切韻』の体系で直音であった4等韻は唐代の『慧琳音義』の体系では拗音化して3等韻のA類に合流するが、その音韻変化は三根谷・平山説では次のように表記されるであろう。(山摸見母で代表させる)

/ken/ > /kian/

問題はやはり声母であって、非口蓋化声母であった/k/がなぜ口蓋化声母/kj/に変化してしまうのか不明瞭である。4等韻の3等韻A類への合流は韻母体系の変化と考えられる。したがって、/e/ > /ia/の変化を山摸見母において素直に表記するならば、/ken/ > /kian/となるはずである。そこで今度は、中間段階に/kian/を加え、声母/k/は介音/i/の影響で口蓋化を起こしたと仮定してみる。

/ken/ > /kian/ > /kjian/

しかし、三根谷・平山式の表記では/kian/はB類を表すものであるから、これではB類がA類に変化したことになり、新たな不都合を生じる。要するに、/k/ : /kj/のような二系列の声母を想定する限り、この音韻変化の表記は容易ではない。そこで、この場合にも重紐の音韻論的差異を介音に求めてみると、音韻変化はいとも単純明快に説明される。

/ken/ > /kian/

ここで /kian/ は /kian/ に対立する A類の表記である。4等韻が A類に合流するという情報は既に /e/ > /ia/ の部分に含まれているので、声母に関する問題は全く生じない。

以上によって、重紐の音韻論的差異を声母よりも介音に帰する考え方の利点が多いことを示し得たと思う。残る問題は舌音字（知組・来母）の介音である。

4. 類相関による舌音字B類説とその問題点

周法高「三等韻重唇音反切上字研究」（1952）に端を発し、平山久雄「切韻における蒸職韻と之韻の音価」（1966b）において音価推定の手段にまで発展した研究が反切上字と帰字の類相関（平山氏の命名）である。類相関とは、A類の反切上字はA類の帰字にのみ用いられ、B類の反切上字はB類の帰字にのみ用いられるという反切用字上の偏りを指し、C類の反切上字がA類・B類・C類のいずれにも用いられる事とあわせて、下図のような関係になる。

上字	A	B	C
A	○	×	×
B	×	○	×
C	○	○	○

唯一の例外として、A類字たる「匹」は反切上字として A類・B類・C類すべての帰字に用いられる。周（1952）は唇音字のみを対象として上の関係を論じたが、辻本春彦「いわゆる三等重紐の問題」（1954）では唇牙喉音字のすべてにこの関係が成り立つことを述べている。

辻本（1954）はさらに唇牙喉音字以外の類の帰属にも触れ、舌音字をB類と断じたが、その詳しい説明は省略された。松尾良樹「広韻反切の類相関について」（1974）は辻本説の根拠を補説したもので、『広韻』の反切に基づいて統計を示し、上字・下字・帰字の相関から舌音字をB類とみなした。その統計では、『広韻』全体を通じて [C類 + 舌₃ (または來₃) → B類] が計27例あるのに対して、[C類 + 舌₃ (または來₃) → A類] がゼロという事になっており、[C類 + B類 → B類]⁽⁵⁾との平行関係によって舌音字がB類と判断されるという。

これに対して平山氏は「中古音重紐の音声的表現と声調との関係」（1977）において、松尾氏の所論を『広韻』のみに成り立つもので、より古い『完本王韻』（宋濂跋本の王仁煦『刊謬補缺切韻』）では成り立たないとした。『広韻』ではゼロという事になっていた [C類 + 舌₃ (または來₃) → A類] が『完本王韻』においては相当数あり、舌音字の類帰属は単純に決められないというものである。森博達「中古音重紐舌齒音字の帰類」（1983）では、平山氏が『完本王韻』に關して示した統計（來母のみ）を一部分訂正し、さらに平山氏が省略した舌音（知組）の統計をも提示している。それらを一つの表にまとめると以下のようになる。

	唇音音節	牙喉音音節	計
[C類+來 ₃ →A類]	5	3	8
[C類+來 ₃ →B類]	1	22	23
[C類+舌 ₃ →A類]	0	3	3
[C類+舌 ₃ →B類]	0	9	9

この統計によれば、平山氏が論じたように、舌音字の類帰属を決定するのは簡単ではないと思われるが、森氏は『完本王韻』においても唇音の場合を除けば舌音字がB類帰字を導く傾向が顕著であるとして、あくまでも舌音字B類説を主張している。平山（1991）は森氏の論を「唇音の状況をことさらに軽視するかのようである」と評した。

両者の間では統計のとらえ方にも違いがある。森氏はC類上字と舌音下字からなる反切がA類とB類のどちらを導くかという観点から、約4分の3がB類を導くことを重視している。一方、平山氏はA類音節またはB類音節のうち舌音下字を用いるものがそれぞれ何%あるかという観点から比較を行っているので、牙喉音音節でB類（平山氏によれば154例）がA類（78例）に比べ圧倒的に多いことを考慮に入れると、舌音字がB類音節に用いられる割合はそれほど顕著なものとは言えない事になる。

さて、辻本・松尾・森の三氏は単に舌音字をB類と主張して論を終えているのであるが、果してその解釈で『切韻』の反切を無理なく説明できるか否かが問題である。まず三氏に従って舌音字をB類とした上で、A類介音を/i/、B類・C類介音を/i/として、[C類+舌₃（または來₃）→B類]と[C類+舌₃（または來₃）→A類]を検討してみよう。重紐の解釈以外はこれまで同様、三根谷（1972）の音韻表記に従い、反切も上田（1975）の推定になる原本『切韻』の反切による。

[C類+舌 ₃ →B類]	居/kīʌ/ + 追/t̪iuei/ → 龜/kīuei/
[C類+來 ₃ →B類]	居/kīʌ/ + 隣/līen/ → 巾/kīen/
[C類+舌 ₃ →A類]	去/k'īʌ/ + 智/t̪ie/ → 企/k'ie/
[C類+來 ₃ →A類]	房/bīap/ + 連/liān/ → 便/bian/

前二例は問題ないようであるが、後二例の[C類+舌₃→A類]と[C類+來₃→A類]の場合は、反切と帰字の介音が一致しないという点で全く合理性に欠ける。つまり、上字も下字も介音/i/でありながら、帰字の介音がなぜ/i/になるのか説明に窮るのである。反切の口唱という点より考えれば、上字・下字ともに帰字の介音と一致するのが最も望ましいことは言うまでもないが、『切韻』の反切には上字・下字のいずれか一方のみが帰字の介音を表現する例も珍しくはない。⁽⁷⁾しかし、帰字の介音が上字でも下字でも表現されないというのは反切としては不備の極みである。このため、辻本（1954）はこのような例をすべて誤字によるものとして処理しようとしたが、その方法はやや独断的で十分な説得力を持たない。前掲の森氏の表によれば、

[C類+舌₃（または来₃）→A類] は『完本王韻』で11例あるし、上田（1975）で原本『切韻』と推定されているものに従えば13例ある。多くの反例が存在する以上、ひとまず舌音字B類説を放棄してみるのが穏当な手続きであろう。そこで、舌音字をA類と考えてみると、上の4例は次のように表記される。（下線部は帰字の音を導く部分。）

- [C類+舌₃→B類] 居 /kü_A/ + 追 /tüei/ → 龜 /küuei/
- [C類+来₃→B類] 居 /kü_A/ + 隣 /lien/ → 巾 /küen/
- [C類+舌₃→A類] 去 /k 'iü_A/ + 智 /tie/ → 企 /k 'ie/
- [C類+来₃→A類] 房 /büag/ + 連 /lian/ → 便 /bian/

すなわち、[C類+舌₃（または来₃）→B類] の場合は上字の介音が帰字の介音を表現しており、[C類+舌₃（または来₃）→A類] の場合は下字の介音がそれを表現していると見なすことができる。この解釈に従えば、河野（1939）以来問題となっていた舌音字の中間的性格は、その音価ではなく、反切の口唱法に起因していることになる。⁽⁸⁾ 反切において上字と下字の介音が異なる場合に、ある時には上字の介音をとり、ある時には下字の介音をとるという反切口唱時の“ゆれ”が結果として舌音字の中間的性格をもたらしたと思われる。実はこのような反切口唱時の“ゆれ”は舌音字に関してのみ生じる訳ではない。歯音字にもかなり見られるし、⁽⁹⁾ 脣牙喉音字にも少数ながら認められるのである。⁽¹⁰⁾

- [C類+齒₃→A類] 房 /büag/ + 脂 /tüiei/ → 眇 /biei/
- [C類+齒₃→B類] 居 /kü_A/ + 脂 /tüiei/ → 飢 /küei/
- [C類+齒₄→A類] 符 /büiuü_A/ + 小 /siau/ → 標 /biau/
- [C類+齒₄→B類] 巨 /gü_A/ + 小 /siau/ → 驕 /güau/
- [C類+羊₄→A類] 許 /xü_A/ + 縁 /jiuan/ → 翩 /xiuan/
- [C類+羊₄→B類] 許 /xü_A/ + 延 /jian/ → 喘 /xian/
- [A類+B類→A類] 匹 /p 'iet/ + 義 /y ie/ → 簪 /p 'ie/
- [A類+B類→B類] 匹 /p 'iet/ + 碲 /m ie/ → 烛 /p ie/
- [A類+C類→C類] 匹 /p 'iet/ + 凡 /biüm/ → 芝 /p 'iüm/

従来、類相関の例外をなすとされてきた反切上字「匹」も、反切口唱時の“ゆれ”という観点で見るならば、決して容認されないものではない事がわかる。⁽¹¹⁾

もし、帰字の介音が反切下字によってのみ表現されるものと考えてしまうと、上例中の「脂」や「小」のように、同一の下字がA類とB類の双方に現れる事が説明できない。したがって、『切韻』の反切すべてを合理的に説明するためには、帰字の介音が時には上字によって表現されるという上の解釈は不可避のものと思われる。「C類+舌₃（または来₃）」の反切がA類とB類の双方を導く理由も、上字と下字の介音が異なっている事によって説明される。それ故、C類の介音が/i/と認められる限り、舌音字の介音は/i/である事が要求されるのである。

5. 結 論

以上述べてきた事をまとめてみると、次の二点に尽きる。

1) 重紐の区別は音韻論的にも介音 /i/ と /ɪ/ に帰するのが妥当である。

2) 舌音字の介音は A類相当の /i/ と考えられる。

1) は三根谷・平山両氏の音韻論的解釈に再考を迫るものである。我々の中古音研究が『切韻』の反切を中心資料とするものである事は言うまでもない。したがって、その音韻論的解釈も『切韻』の反切をうまく説明できるものでなければならぬであろう。『切韻』においては、A類音節の反切上字として A類字が用いられるのは約 3 割に過ぎず、残り 7 割は C類字である。三根谷・平山両氏の解釈では、A類字の声母 (/pj/, /kj/ 等) と B類・C類字の声母 (/p/, /k/ 等) が全く異なった音素として提示されている訳であるから、A類音節の大半の反切に矛盾をきたす事になる。この矛盾を取り除くためには、どうしても重紐の区別を介音に帰する必要がある。これは有坂氏の想定した二種の拗介音を音韻論においてそのまま認めようとするものであるから、立論上も全く無理のないものである。

2) に関しては、これを支持する資料が多く存在する。以下の通り。

a) 朝鮮漢字音で舌音字は牙喉音 A類と同様に拗音で現れる。

b) 『切韻指南』等の反切門法で、舌音字と唇牙喉音 4 等字の共通性が示唆されている。

c) 相補分布をなす庚₃韻 (B類) と清韻 (A類) において、舌音字は清韻のみに収められている。

d) 相補分布をなす真韻合口 (B類) と諄韻 (A類) において、舌音字は諄韻のみに収められている。

このうち a) と b) は既に有坂 (1937-1939) で述べられたものである。また、董同龢「廣韻重紐試釋」(1948) に b) と同様の記述がある。次の c) も董 (1948) で指摘されたもので、舌音字が A類に相当する事の最も積極的な根拠と言えるものである。庚₃韻の韻母は /-iaŋ/, 清韻の韻母は /-iŋ/ と考えられるが、舌音字が齒音字と共に清韻にのみ収められ、庚₃韻に収められなかったのは舌音字の介音が /i/ であったためと判断できる。⁽¹²⁾ d) も同様の状況を示すが、原本『切韻』においては真韻と諄韻が分かれていなかった事が知られている。しかし、いわゆる「唐韻残卷」や『廣韻』等で諄韻 (および相配する韻) を独立させているのは、真韻合口が /-iuen/, 諄韻が /-iuən/ ⁽¹³⁾ であった事によるであろう。したがって、舌音合口字が齒音合口字と共に諄韻にのみ収められているのは、やはり舌音字の介音が /i/ であったためと考えられる。

重紐を有する韻における舌音字の介音を /i/ とした場合に問題となるのは、B類帰字を導く反切において下字にしばしば舌音字が現れる事であるが、よく観察してみると、その場合の反切上字は必ず /i/ の介音を持つもの (すなわち B類字か C類字) である。したがって、舌音下字

を含む反切がB類帰字に対して用いられる時には、帰字の介音は上字によって表現されていると見なすことができる。歯音の章組字・精組字（介音 /i/）がB類帰字に対して用いられる時も同様である。一方、C類上字（介音 /i/）と舌音あるいは歯音の下字（介音 /i/）からなる反切がA類を導く場合には、専ら下字の介音が帰字の介音を表現している訳である。

このように考えると、A類字の「匹」（介音 /i/）を上字とする反切がB類帰字・C類帰字を導く場合に、下字には決して舌音字や歯音字が用いられない事も説明がつく。舌音字や歯音字を用いてしまうと、上字によても下字によても帰字の介音 /i/ が表現できないからである。A類字を上字としてB類帰字・C類帰字を導くためには、少なくとも下字に介音 /i/ を持つものを用いなければなるまい。

以上のような状況から、上字と下字の介音が異なる場合には、いずれの介音を選択するかという原則がなく、口唱に際して“ゆれ”があったものと判断される。『切韻』の反切にこのような“ゆれ”が多く見られるのは、陸法言がそれら反切の作製者ではなく、採用者にすぎなかった事を示すものもある。『切韻』反切の来源は近年、遠藤光曉氏の一連の研究で徐々に明らかになりつつあるが、それによれば、陸法言は『切韻』編纂にあたって、分韻のみならず反切までも六朝韻書をかなり踏襲しているようである。しかも、複数の韻書によっているため、結果として『切韻』に現れる反切用字の特徴も多元的なものにならざるを得ない。⁽¹⁴⁾

一方、『切韻』の反切に関しては平山（1977）の次のような見方もある。

（『切韻』反切が）先行する諸韻書や他の音義、字書などに載せられた反切に依拠した場合も多いかも知れぬ。しかしそのような場合にも、少なくとも原則としては、撰定者の口唱による吟味を経て、差し支えないと認められた用字はそのまま取り入れられ、適切でないと認められた用字はそれを改めた上で取り入れられたと考えられる。このような意味において、『切韻』反切の大部分はすぐれて音声的な性格と、反切撰定者の音声体系を媒介とする均質性とを具えているとみてよいであろう。切韻系韻書の反切用字にみられる種々の原則や傾向が、中古音の音声的実質を反映するものであるという見方は、陸志韋氏が……強調したところであり、私もこれまでいくつかの論文においてそれを前提として作業を行なってきた……

『切韻』の反切が撰定者（陸法言）の口唱による吟味を経たであろうという指摘には全く賛成であるが、そうであるからと言って、採用された反切がすべて一定の原則によって構成されているという保証はない。もし、それほどの厳しい吟味がなされたとしたら、上述のような“ゆれ”的生じる余地はなかったであろう。実際の反切の吟味はごく緩やかに行われたと考える方が無難である。つまり、上字と下字の介音が異なる反切においても、幾度かの口唱を通して自分の知っている帰字の音声をどうにか導く事ができれば、その反切をそのまま採用したと想像される。したがって、後人が勝手に厳格な原則を作り上げて『切韻』の反切を解釈すれば、撰定者

中古音重紐の音韻論的解釈をめぐって

(16)
の意図とは異なる音を帰納してしまう危険性がある。『切韻』の反切を理解するには、撰定者（陸法言）の緩やかな撰定原則というものを考慮する必要があろう。

6. 余 論

最後に、介音に /i/ と /ɪ/ の二種を認めた場合、声母体系の解釈にどのような影響があるかという点について触れておきたい。

本稿では、唇牙喉音字の介音を A 類 /i/, B 類 /ɪ/ としたほか、歯音章組字・精組字・日母字 /i/, 荘組字 /ɪ/, 舌音知組字・来母字 /i/ を想定した。舌歯音字については、厳密に言えば、重紐の対立を有する韻の舌歯音についてのみ検討した訳であるが、仮に重紐の対立を持たない韻における舌歯音字の介音も同様の状況とすると、中古音の複雑な声母体系の簡略化に新たな展望が開ける。

韻図で歯音の 2 等に置かれる莊組と 3 等に置かれる章組は、異なる声母を持つものと一般に理解されている。つまり、莊組はそり舌音（三根谷氏・平山氏の表記では /ts/ 等）であり、章組は舌面音（/tś/ 等）である。しかし、介音に /i/ と /ɪ/ を認めると、これらは韻母において完全に相補分布をなすので、音韻論的にはただ一系列の声母を想定する事が可能となるのである。仮にその声母を /tʃ/ 等のように表記して、いくつかの例を三根谷（1972）の表記と比較してみると以下のようなになる。

<音価>	<三根谷>	<本稿試案>
脂韻生母「師」	[ʂri]	/ʂiei/
書母「戸」	[ʂi]	/ʂiei/
侵韻莊母「簪」	[tʂiem]	/tʂiem/
章母「斟」	[tʂiem]	/tʂiem/
薛韻生母「械」	[ʂiɛt]	/ʂiat/
書母「設」	[ʂiɛt]	/ʂiat/

この解釈を採用すると、中古音における声母体系は従来よりかなり簡単なものになる。つまり、三根谷・平山両氏の体系で、/ts, ts', dz, ʂ, ʐ/ と /tś, tś', dź, ʂ, ʐ/ であったものが、/tʃ, tʃ', dʒ, ʃ, ʒ/ の一系列に統合される訳である。

では、中古音（『切韻』の体系）において介音 /i/ を有したと考えられる章組字が、『韻鏡』において 3 等に配され、介音 /ɪ/ を有したと考えられる莊組字が 2 等に配されるのは何故か。この問題についての最も合理的な解釈は三根谷（1953）に見られる。三根谷氏はまず章組字が後にそり舌音化を起こす事に着目して、「韻鏡の時代にすでにその変化がはじまり、舌背的な調音の tʂ, ʂ 等から舌尖的調音の tʃ, ʃ 等に変化していたと考えることは許されないであろうか。そ

のように考えれば、それらの音ではじまる音節の母音が四等に排されるべき母音ではなしに三等の母音をとることが可能である。」とし、さらに莊組字については、「そのそり舌の調音の故に介音 -i- を失い（或は -u- に變えて合口化）直音となり、ここに二等の位置を得ることができる。」と説明した。三根谷氏の解釈を本稿の立場に即して言い換えれば、『切韻』で /ʃiat/ のように介音 /i/ を有していた莊組字は『韻鏡』の時代には /sat/ と直音化し、/ʃiat/ のように介音 /i/ を有していた章組字は『韻鏡』の時代には /ʃiat/ のように介音 /i/ を有するようになっていたという事になる。

また、三根谷（1953）では、いわゆる三十六字母において莊組と章組が「照・穿・牀・審」のように同じ字母で表されている事についても、「retroflex ($t\bar{g}$ など) と palatal ($t\bar{c}$ など) では（殊に ts など dental の破擦音及び摩擦音も併存するから）諒解し難いが、 $t\bar{g}-t\bar{f}$, $t\bar{g}'-t\bar{f}'$, $d\bar{z}-d\bar{ʒ}$, $\bar{s}-\bar{f}$ とすれば考え易いことであり、既にそれらの子音に續く介音・主母音に差別が認められるに至ったと考える場合にはフォネームとしてはそれぞれ一つの /t\bar{f}, t\bar{f}', d\bar{ʒ}, \bar{f}/ とすることも不可能ではない。」と述べて、『切韻』よりやや下った時代には莊組と章組を一系の音素と見なし得る可能性を示した。本稿の解釈はこれをさらに『切韻』の時代にまで引き上げようとするものである。三根谷氏の解釈による『切韻』の体系では、拗音音節における莊組字と章組字が同一の韻母を有するので、声母の方に音韻的の差異を見出さざるを得ないのであるが、本稿の解釈では介音に差異を認めているので、声母を同一の音素と見なす事は少なくとも理論上は問題ない事になる。

以上、余論として、重紐の差異を音韻論的に介音に帰した場合の声母体系への影響について述べた。

注

- 1) 有坂氏は「カールグレン氏の拗音説を評す」以前にも、「萬葉假名雜考」（1935）や「漢字の朝鮮音について（上）・（下）」（1936）において、重紐関連の問題に簡単に触れている。また、公刊は遅れるが1933年頃の執筆になる『上代音韻攷』（1955）でも、既に「カールグレン氏の拗音説を評す」と同様の詳しい議論がなされている。
- 2) 「切韻」において、唇音もしくは牙喉音を有する拗音韻のうち、A類とB類の双方を含む韻は支・脂・祭・真・仙・宵・幽・侵・塩の各韻（および相配する諸韻）、A類のみを含むのが清韻、B類のみを含むのが庚3韻、C類のみを含むのが東3・鍾・之・微・魚・虞・麌・文・殷・元・陽・尤・嚴・凡の各韻である。さらに、平山久雄「切韻における蒸職韻と之韻の音価」（1966b），同「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」（1972）によれば蒸韻はB類とC類の双方を含むという。なお、直音と拗音の双方を含む韻について、本稿ではその拗音部分を「東3韻」「庚3韻」のように表示する。
- 3) 声母のグループに関する「莊組」「章組」等の呼称は李栄『切韻音系』（1952）による。すなわち、「幫滂並明」が幫組、「端透定泥」が端組、「知徹澄」が知組、「精清從心邪」が精組、「莊初崇生俟（いわゆる正齒音2等）」が莊組、「章昌船嘗常（正齒音3等）」が章組、「見溪群疑曉匣影羊」が見組である。

中古音重紐の音韻論的解釈をめぐって

- 4) 唇音字に開合の対立がないため、三根谷氏の表記では唇音字の場合 /-u-/ を記さない事になっている。敢えてこれを記せば、/kiʌ/+ /mjiuet/ → /kjiet/ のようになり、帰字の合口性が反切下字によって示されている事が一目瞭然となる。ただし、唇音の合口介音をどのように扱うべきかについては考慮すべき問題が多い。遠藤光暁「『切韻』における唇音の開合について」(1991)によれば、所属する韻により、また重紐の別により、唇音における開合の扱いが異なるという。
- 5) 松尾氏の統計には大いに問題があると言わねばならない。自説に不利となる [C類+舌3 (または来3) → A類] の例を故意に除外しているからである。森 (1983) には『広韻』に関する無修正の統計が提供されており、舌音に関わる部分の数値は以下のとおりである。

	<A類>	<B類>
[C類+来3]	5	17
[C類+舌3]	4	8
計	9	25

- 6) 『広韻』で成り立つと平山氏が述べているのは、恐らく松尾氏の示した統計によっているのであろう。上注で示したような統計に基づけば、『広韻』においても松尾氏の論は成り立たないと主張されたはずである。
- 7) 暫時、三根谷式の表記に従って例を示せば、「許 /xiʌ/+ 江 /kaug/ → 肝 /xauŋ/」や「火 /xua/+ 季 /kjuei/ → 皿 /xjuei/」では /i/ 介音の有無は下字によってのみ表現されている。また、「危 /ŋjue/+ 賜 /sie/ → 偽 /ŋjue/」では帰字の合口性 (/u/ 介音) は専ら上字によって導かれる。やや例外的なところでは、「乙 /iʌt/+ 白 /buak/ → 簿 /iuak/」のように、帰字の介音 (/iu/) が上字 (/i/) と下字 (/u/) で半分ずつ表現されていると思われるものもある。なお、最後の例のうち、「白」は三根谷氏の表記では /bak/ であるが、合口性を明白にするため便宜上 /u/ 介音を表示した。注4) 参照。
- 8) 本稿で想定している反切の口唱法は一般に説明されているものとはやや異なる。反切の口唱法に関する説明として最も広まっているのは、平山久雄「敦煌毛詩音残卷反切の研究(上)」(1966a) の中で述べられた次のような方法であろう。

まず、上字と下字の音を緊密につづけて発音し、それを繰り返しながら、上字韻母、下字声母にあたる部分の音声の調音をゆるめ、それと共にそれらの間に存する音節環境のはっきりした分節を次第にぼかしてゆく。やがてこれらゆるめられた調音をとり去って、上字声母と下字韻母を直接に結び合せ、一音節に発音する。このようにして唱え出された音が、反切の示す帰字の音として扱われた、と想像する。

これはいわば“縮合式口唱法”とでも称すべき方法である。一方、遠藤光暁「敦煌文書 P 2012 「守溫韻学残卷」について」(1988) では、『韻鏡』序文、元刊本『玉篇』「玉篇広韻指南」中の「切字要法」、『文鏡秘府論』所引『調四声譜』などの資料によって、以下のような“分析的口唱法”とも言える方法を想定している。

この字音表示法がどのようにして創出されたかについては諸説があるが、上古以来の合音現象が内因となり、仏教の伝来とともに梵字に触れたことが外因となって反切が生まれたとするのが妥当な所であろう。梵字では子音字(但しそれのみで綴られる場合には母音 a を伴う)が母体となり、それに母音記号が付加されることによって様々な音節が表わされる。もし反切の案出に梵字が果たして関与していたならば、原初の認識においては、反切上字と下字は対等な関係にあるのではなく、上字が母体であり下字はその容飾と見做されたであろう。この場合、帰字の音声を求める過程はまず上字を土台として声母を浮かび上がらせ、それに下字の韻母を配合するという底のものであったであろう。

これに対して、本稿の筆者が想定する反切の口唱法は“声母代入式口唱法”(あるいは双声法)と呼びうるものである。仮に声母を S、韻母を Y で表すと、反切というものは「S₁Y₁ - S₂Y₂」という形式からな

る。帰字の音を求めるためには、反切の上字と下字を何度も連続した後、それを双声語に作り変える方法をとったと思われる。すなわち、「S₁Y₁—S₂Y₂, S₁Y₁—S₂Y₂, ……S₁Y₁—S₁Y₂」という操作を行なって、下字の声母S₂の部分に上字の声母S₁を代入してやり、帰字の音「S₁Y₂」を導く訳である。「冬：都宗反」を例にとれば、tuʌ-tsaug, tuʌ-tsaug, tuʌ-taugとして「冬」の音/taug/を求める。現代的な感覚からすれば、あまり実践的に感じられないかも知れないが、漢代や六朝期には既に双声や疊韻という概念は一般的なものであったから、二音節を双声語に作り替えるこのような口唱は、少し慣れればごく容易に実行できたはずである。また、この口唱法は、Y₂の部分にY₁を代入する“韻母代入式口唱法”（疊韻法）と対になって、六朝期に流行したいわゆる双反の作製に必要なものであったと考えられる。詳細については、別に稿を起して論じる事にしたい。

- 9) 森(1983)の統計によれば、『完本王韻』において、[C類+齒3(または齒4・日母)→A類]が32例、[C類+齒3(齒4・日母)→B類]が8例である。つまり、32例は下字の介音/i/が帰字の介音を表現し、8例は上字の介音/i/が帰字の介音を表現したものと考えられる。
- 10) 唇牙喉音字が関わる“ゆれ”的例としては、最も頻繁に現れるのが上字「匹」と下字「義」である。また、上田(1975)、平山(1977)、松尾良樹「幽韻小論」(1978)などでは、幽韻（およびその相配韻）において、唇音をB類、牙喉音をA類と見なしているが、仮にそれらの説に従えば、以下も“ゆれ”的例となる。

[B類+A類→B類] 鹿/mie/+幼/ieu/→謬/mieu/
 [C類+A類→A類] 丘/k'iʌu/+幼/ieu/→蹊/k'ieu/

- 11) 「匹」字については從来さまざまな解釈がなされた。辻本(1954)は「丕」の誤字とし、平山(1977)は「声母に伴う無声気音、主母音の狭さ、入声である故の短促さ」等の原因が重なって、A類的特徴が薄れた結果、上字として広い使用範囲をもつ事ができたとした。また、平田昌司「反切上字「匹」の一解釈」(1982)では、方言音を根拠に、「匹」がもともと二つの音を持っていたとし、『切韻』ではその双方の音に基づいたため混乱が生じたと論じている。諸説のうち、まず、「匹」字が滂母の反切上字として比較的多用される事を考えれば、辻本説は武断に過ぎよう。平山氏と平田氏の説に関しては、遠藤光暁「『切韻』における稀少反切上字の分布」(1990b)の中で述べられた以下の指摘が妥当であろう。

平山1977、16-18頁は、「匹」がA類的特徴である強口蓋化の特色を薄められた形で音声的に実現したと想定し、そのため特に広い使用範囲をもつことができたとしている。更に、止攝以外では滂母の下でA・B類が対立することなく、多くの韻ではA類のみが存在する事実を挙げているが、もしそこで行なわれている音声的理由づけが正しいのならば、それらの場合も有氣性などのA類的特質を薄める音声的条件を備えている筈だから、A類ではなくB類となっていることが期待される所であり、いかにも苦しい説明である。また、平田1982は「匹」が両読字であったと想定することによって説明を与えるとしているが、多読字は帰字の音を一意的に定められないため反切用字としては不適格であり、そういう字が『切韻』において直音類・拗音類にわたり広範に用いられるとは考え難い。

- 12) 佐々木猛「庚清韻贅説」(1983)は庚3韻と清韻が一体となって重紐の対立を有する事を論じたものであるが、辻本説によっているので、清韻がA類（唇牙喉4等・章組）とB類（知組・來母）からなると見なしており、庚3韻（B類）からの分立理由が明白でない。
- 13) 平山久雄「切韻の例外的反切的理解について」(1962)では、合口A類のみが諄韻として独立した理由を、以下のような音価推定に基づいて説明している。(ただし、以下は「牙喉音の下での四種の韻母の具體的音聲」と規定されている。)

(イ) 開口三等 /-iɛn/ [-iɛn]
 (ロ) 開口四等 /-jen/ [-jiɛn]
 (ハ) 合口三等 /-iuen/ [-wiɛn]

中古音重紐の音韻論的解釈をめぐって

(二) 合口四等 /-iuen/ [-jyēn]

我々の用語で言えば、(イ)と(ハ)がB類、(ロ)と(ニ)がA類で、『広韻』等では(イ)(ロ)(ハ)が真韻に、(ニ)が諺韻に属する。平山氏によれば、「(イ)(ロ)(ハ)に於ける[−e−]は、それに先行するのがいづれも非圓唇母音であるから、精密な意味でも相互に極めて近似したものであったと考えてよい。これに對し、ひとり(ニ)に於ける[−e−]は先行するのが圓唇母音[−y−]であるため當然その影響をうけて、精密には[ɸ]或は[Y]に近いものとして、(イ)(ロ)(ハ)に於ける[−e−]とかなりニュアンスの違うものであった可能性が大きい。」という。

- 14) 「『切韻』反切の諸来源——反切下字による識別——」(1989a), 「『切韻』小韻の層位わけ」(1989b), 「臻櫛韻の分韻過程と荘組の分布」(1990a), 「『切韻』における稀少反切上字の分布」(1990b)など。
- 15) 例えば、河野(1939)において、「飢」字をA類字のグループに属するものとして扱い、その朝鮮音[kii]を「異例のように見える」としているのは、その反切「居脂」が(殊にその下字「脂」が) A類を導く筈だという予断によったものであろう。平山(1991)にも同様に「飢」字をA類と見なす旨の記述がある。しかし、「韻鏡」で3等に置かれ、朝鮮音が[kii]である事実を直視すれば、「飢」は明らかにB類であって、その反切「居脂」がB類を表現すべく用いられている事を認めるべきである。
- 16) 平山久雄「中古漢語の音韻」(1967)による。

参考文献

- 有坂秀世(1935) 「萬葉假名雜考」, 有坂(1957)所収。
(1936) 「漢字の朝鮮音について(上)・(下)」, 有坂(1957)所収。
(1937-1939) 「カールグレン氏の拗音説を評す(一)~(四)」, 有坂(1957)所収。
(1955) 「上代音韻攷」, 三省堂。
(1957) 「國語音韻史の研究 増補新版」, 三省堂。
上田正(1975) 「切韻諸本反切総覽」, 均社。
遠藤光曉(1988) 「敦煌文書P2012「守溫韻学残巻」について」, 『青山学院大学一般教育論集』29。
(1989a) 「『切韻』反切の諸来源——反切下字による識別——」, 『日本中国学会報』41。
(1989b) 「『切韻』小韻の層位わけ」, 『青山学院大学一般教育論集』30。
(1990a) 「臻櫛韻の分韻過程と荘組の分布」, 『日本中国学会報』42。
(1990b) 「『切韻』における稀少反切上字の分布」, 『中國語学』237。
(1991) 「『切韻』における唇音の開合について」, 『日本中国学会報』43。
河野六郎(1939) 「朝鮮漢字音の一特質」, 河野(1979)所収。
(1979) 「河野六郎著作集」第2巻, 平凡社。
佐々木猛(1983) 「庚清韻贊説」, 『伊地智善繼・辻本春彦両教授退官記念中国語学・文学論集』所収, 東方書店。
周法高(1952) 「三等韻重唇音反切上字研究」, 『歴史語言研究所集刊』23-下。
辻本春彦(1954) 「いわゆる三等重紐の問題」, 『中國語学研究会会報』24。
董同龢(1948) 「廣韵重紐試釋」, 『歴史語言研究所集刊』13。
平田昌司(1982) 「反切上字「匹」の一解釈」, 『均社論叢』11。
平山久雄(1962) 「切韻系韻書の例外的反切の理解について」, 『日本中国学会報』14。
(1966a) 「敦煌毛詩音残巻反切の研究(上)」, 『北海道大学文学部紀要』14-3。
(1966b) 「切韻における蒸職韻と之韻の音価」, 『東洋学報』49-1。
(1967) 「中古漢語の音韻」, 『中國文化叢書①言語』所収, 大修館。
(1972) 「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」, 『東洋学報』55-2。

富山大学人文学部紀要

- (1977) 「中古音重紐の音声的表現と声調との関係」,『東洋文化研究所紀要』73。
- (1991) 「中古漢語における重紐韻介音の音価について」,『東洋文化研究所紀要』114。
- 松尾良樹 (1974) 「広韻反切の類相関について」,『均社論叢』1-1。
- (1978) 「幽韻小論」,『均社論叢』5-1。
- 三根谷徹 (1953) 「韻鏡の三・四等について」,『言語研究』22/23。
- (1972) 「越南漢字音の研究」, 東洋文庫。
- 森 博達 (1983) 「中古音重紐舌齒音字の帰類」,『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念中国語学・文学論集』所収, 東方書店。
- 李 栄 (1952) 「切韻音系」, 中国科学院。